

越冬はやらにやあがんの。

冬が死神を呼びこく。仕事がなくなり、飢えと寒さで僕たちの仲間を殺した冬が来る。悪徳業者や手酷師は、仕事をモッてこん。僕たちも仲間を死のうが、飢えてようが知らんかあする。職定、行政はなにもしない。

僕達の仲間がコンクリートの道ばたで倒れて、死んでたり、寒空にアオカシてくいる時、手酷師や業者は、あたたかいコタツに入って、正月の酒をのみ、どうにも食ひ、ミカンを食ひ、遊ぶほうでいる。僕たちからピンハネした金で、正月を楽しくすごしやあがる。資本主義とは、なんでこんないやな世の中なんやろ。飢くもんが、正月にチモクえおに死んでいくのに、働かんピンハネばっかしや。ころアホンダラ酒飲ん、モテくって、存びやがる。おまけに、倒れてくいる仲間を、ポリ公は助けん。死んだら、ゴミみだいに火葬場か大学病院に売り飛ばしてやる。

僕は、寺の改築工事をやった。遅い回りのながら

仕事をした。そやけど、僕が道ばたで倒れて死んでも、あの寺の墓に埋めてく山へん。ポリ公も府も市も助かるもんまで殺してしまふ。資本主義の世の中やから、家を造って、僕らはその家に住むこともできん。僕らが造って入る所は、刑務所、留置所、精神病院。

僕はそやから、今世の中に頭にくる。泣き言いっことも仕方ないから、自分の生命や仲間の生命は、みんなを呼らなあかんと思ふ。府やポリ公に頼んでもや、てく出る訳ない。あんだけ悪いことばっかしや。てるポリ公打んか、所働者を助ける訳ない。そもそも、冬に竹付着が苦しい目に会うのは、業者手酷師が仕事をモッてくるからや。必要の時、無理理にでも仕事ついでいて、コキつかうくせに、必要をなく、たら求人にもてる。

なんせ飢え死にばんかないようにせなあかん。ゆしらの生命はゆしらを守る。それに邪魔してくるやつは敵や。

僕は越冬を斗争としてやらなあかんと思ふ。

どうせハ俺も今若いけど、年とったら冬こまる。
若いうちに、今の世の中、ちよつと心も変えたい
のんやん、
春本 健吉

我々に新しい歴史を

現在、釜ヶ崎及び西成地区で、労作者解放の最終的には革命の目標に、諸団体及び学生が入り込み活動している。

労作者の味方だ、被抑圧人民解放と叫ぶ、活動していつながらあなただけ、最前線の人民なのか？

あなただけは、抑圧人民ではなく、職業革命家であり、理想主義者である。

釜ヶ崎の解放は、現在の社会に飼いかつらされた、犬猫になまか、山犬や狼になって、社会に反抗して生きるしか、今のところはない。

一般社会人及び中産階級層諸君は、社会主義及び共産主義になつても、今の生活には余り関係なく、今、革命を望み、切望しているのは、釜ヶ崎労作者

及び、全国部落人民である。

マルクス、レーニン、毛沢東しかり。思想が云々言われているが、それは個人の思考方法であり、何十年かたち、歴史が解釈をつけているにすぎない。

我々、釜ヶ崎労作者の考える層は、あらゆる固定観念にとらわれず、新しい日本あるいは世界の夜明けに向けて、新しい歴史を作るために、資本主義社会、日共及び政治団体を解体しなければならぬ。

活動家諸君の、あなただけは、労作者を指導するとか、教育するとかより、労作者に学びか、あるいは黙つてついてゆくしかない。

釜ヶ崎労作者は全国にちらばり、地域解体及び《総反乱》に向つて前進しなければならぬ。

我々の求める搾取なき平等の社会に向つて。

釜ヶ崎自雇労働者 森本 弘

釜ヶ崎と言ふ名

一折竹者

光陰矢のごとしとやう、本年に年月のたつのは早い。俺も田舎に来てから十数年になる。

俺も来た頃、釜ヶ崎という名を知つてゐる折竹者は居なかつた。釜ヶ崎という名はすでに人々から忘れられていた名であつたのである。釜ヶ崎という名の復活したのはオ一回の暴動後である。

オ一回と昔今俺達の住む一帯を釜ヶ先と呼んだらしい。昔も又比喩は貧しい人々のたまり場であつたところだ。

朝、夫が日雇仕事に行つても食費代もなし後に残る妻子は食うものも何一つ無い状態であり、そこでやむを得ず、自分達の唯一の財産である釜を持つてゆき、此の釜を賣り若干の金を借り始めて仕事に行けたらしい。日銭を持って帰れば釜は生活に於て絶對的な必需品だから何を置いても先に受け出しに行く。この様な生活をしていたらしい。そこから釜ヶ崎(先)という名が生れ、何時とはなし

事ができさう。

俺達にドレイ敗れた折竹条件と日常生活を押しつける事は、又折竹者階級の攻勢の防波堤の役割をすする。資本家奴にとつては、笑いの止まらん程、都合の長い事であらう。

資本家奴の意を受けた報道機関は、此所にすでに人々から忘れられていた、釜ヶ崎という名を復活させた。

奴らに取つては笑ひが止らん程都合の長い事でも俺達折竹者にとつては、たまたまのものではない。事実限りな無利権、不当に人権を奪われ、差別されてゐるの上、更に名称で迄差別され一層収奪が強化されてゐると言ふ事は、故に俺は釜ヶ崎という名も、其の後、俺達に關係ある所でのみ改名して付けてゐる。愛蔵」といつ名も嫌ひであつた。其の名を耳にする度にいやな気がしたものだ。

今では、俺の念いも変つて来た、愛蔵という名には、今も憎悪を感じながら、釜ヶ崎と言ふ名は、進ん

にそれな釜ヶ崎と変わったものらしいのだ。

オ一回の暴動を最初報道機関は西成事件として大きく取り上げた。

全国の耳目は、一時西成に集中され、フル新算も或る程度の興味を置き、又報道された。

西成区に住む小ブルジョア達は、此の事が大層不満だつたらしい。事実、小ブル連の娘さんが婚約していた相手側より、其んが惚ろしい所に住んでゐる娘さんとは破談になつたりした、喜劇も有つたらしいのだ。

此等の者達は關係方面に付き掛け、西成区は広大であり、事件が起つた地域は極く限られた所だと言つてくれ、と泣きを入れたらしいのだ。此の事は言ひ変えれば、俺達を差別せよと言ふ事だ。

時の支配者階級である資本家奴にとつては、此の事は大変都合が良い。俺達を名前で差別する事によつて、一般社会から遊離さし、俺達を孤立さし、孤立さす事によつて、搾取と弾圧が容易に出来、何時までも、ドレイ的な低賃金と重労働に縛りつける

を口にするようになった。

変えた原因は、釜ヶ崎共斗会議の仲間達のカツヤクであつた。此の釜ヶ崎折竹者に加へられていた、暴力手師師女の無謀極まる暴行を二編したと言ふ事は、実に偉大な事だと思つた。全釜ヶ崎折竹者に与えた感動と自信を持たしたという功績は固り知れない程大きい。

俺は今思つ、差別の為に復活された釜ヶ崎という名を、サンビンと輝く栄光の名に変える迄、釜ヶ崎の一人の折竹者として闘う。

今からは、日和見主義的な昇進を捨て、次の社会を確実に、になつ折竹者階級の一人であるという認識をえたら、今からは俺自身の生活を自覚した折竹者の生活に改め、実践しよう。

仲間達と語り合ひ、行動を共にして、斗争の中で誰かが敵か、誰が味方かを明らかにして欲しい。

俺は俺にでも出来る、小さな事を一つ一つ積み重ね

内之行こう。

フロレタリアートが全権力を樹立し、俺達、金ヲ
崎守竹者に名乗共と解放され、理想の樂園に足をふ
み出す日迄、例へ少々の事でも精進重ね、何時、い

飯場脱走記

俺は師走の冷い風を身体に感じると共に、暴力飯
場福西組での体験を思い出し、暴力飯場の悪徳非道
なやり方、唯儲ける事しか考えない資本家共、其の
類には搾取の対象である俺達の竹竹力奴隷の需要
に惹いて、使節されるならば、その手段が、暴力に
依ろうが、何に依ろうが一向に構はないのだ。その
だから、俺達が暴力によつて監視され、前近代のな
ぞして非人間的な強制竹竹者させられ、地獄のよう
な苦しみと味い。それとも、元請の監督は我関せず
とばかり知らん顔。比喩に冷酷な資本家階級の性格
があるように思ふてならない。

俺は、警察や行政は人民に奉仕する公僕だと思つ

かなる時にも、誘ひ高き竹竹者階級の一員である事
を忘れなれど生きていこう。最初嫌いだ、た金ヲ崎
と言つ名が、栄光の名となる日迄、頑張りたい。

金ヲ崎守竹者石オ、と声高に叫ぶる日まで。

ていた。ところが驚いた事に、奴隷は大資本と暴力
団の番犬として奉仕する事しかしないという事を、
嫌という程知らされた。

此らの事を思い考える時、現日本の社会の中に存
在する、余りにも大さき矛盾に突き当たる。それらの
矛盾は、集約的に俺達西成の竹竹者におそひかっ
てきている。

あるいは特殊地帯としての蔑視であり、あるいは
理由なき差別であり、あるいは竹竹法規の蹂躪であ
り、あるいは残酷な暴力である。

俺は、俺達西成竹竹者のこの実態に対し、無限の
憤滴を抱くと共に、師走の風に呼ぶ超えられた暴力飯
場福西組の悪徳非道なやり方に對し、心底より憎悪
の念を新たに、福西組よ、俺は一生お前を忘れなれ

どとどに誓う。

X X X

それは数年前の、嫌に冷い風の吹く十二月の或る夜の出来事だった。

俺は此の日、アニコの奥門、正月を目前にしなかり、一向に溜らぬ金に焦りを感じ、パテニコ屋に入ったのが運のつき、一銭も持たぬオケラになった。しばらく残念ぶ台をにらんふれたが、思い直して、大パテニコ店を出る。かなり足取りを歩き出すとたん大徳も言われぬ空腹感がおそってくる。考えれば、夕食もまだ食ってないのだ。勝つかから食おうという物平根性から食ってなかったのだ。

さて、今晚これからとないしようと思きながら、考へ出す想念の中に入りく、な人の顔が浮んで消え、走馬燈のように駆け回るが、一向に良策は考へられない。

とにかく一応、親しい友人に頼んで見ようと思ひ、清水君の宿を訪れる。皮肉な事に、彼も又、ボート

レースで素寒食になり、俺から借りようと思つていたりしりのぶ、二山では話にもならぬ。

懐場に頼んで、ドヤ銭借りてしようかと思つてもみだが、現在の宿に移つてから十日程しかたつていない。どうせ無理な話だろうと思ひ、締めて青カン賞格でセンターに向う。

センター前のガード下に十四、五人の仲間達ばかり火を囲んでいた。仲間達がそいぐに話す事は、俺とにたりなものだ。パテニコやキャンブルを食った者、運悪く仕事にアフレた者、冷えきつた体たき火は本当に有難い、ホ、一人をいり寂しさや不安より、同じ境遇の仲間達が大概いる方が、何だか心丈夫だ。

俺達は、皆人なして薪を取りに行く。俺はついでにミケモクも五、大木拾ってくる。皆んなぞいれいボール紙を敷いて寝る。でも、前を向けば背中が寒く、後を向けば前は寒い、二山では本当に眠る事はできんかと思つた。

仲間の中に、話の上手な男がいて、皆人目を笑わせ
ていた。

二の時、巡回のポリ公が二人やって来て、火を消
せとぬかす。俺達が、金はなし、寒くてやり切れん
からたき火をしているんだ。此處は、火父の心配も
ないんやし、又十分注意しますから、警察の旦那、
大目に見て下せえ、といくら頼んでも、ポリ公共は
耳も借さず、附近の民家から借りたバケツに水を吸
んで来て消してしまふ。

困っている俺達の火を消しやがって、より以上苦
しめようとしやがる。他の仲間達もロクにポリ公の
悪口を言つ。俺が、「豚大ポリ公とは、うまく名付
けた。取のまづにみにくくて、汚くて、臭い匂いか
るんくして、金持の番大としてワンくほえる事
しかせん奴だからな、おいら等は素暗しに名付頼だ
ぜ、と言えば、仲間達の中から、少々な笑が薄く。
何分、寒くてたまらぬので、俺達は又たき火を始
める。

夜の更けるに従つて寒気は厳しく増す。仲間達

んやし、毛布も着て寝れるんや。青カンする事思つ
たら、天国やぞ」

他の一人が合槌を打つ

「ほんまにそれの大がええお知れんや、けど前科
つくのには嫌やな」

この仲間は、警察は怒い所という強い先入観と、
現場の苦痛とをほかりにかけ言っているだけより
真剣味が出る。

前の一人が言う、

「百円ごらりの品物のかっぱらいで、前斜まるつく
けえ、一晩不夕箱天国に泊りゃお終いのまきさ」

前の仲間の話を、後の仲間は感心したように合槌
しながら聞いている。

そこへ、ポリ公が再びやって来て「さつと消した
のに又だ。今度やったら承知せんぞ」とぬかす、再
公消をうとする。仲間の一人が文句を言つと、ポリ
公がぬかす、「じやますると公務執行妨害でバケツ
ぞ」と。

の話す言葉も、なんだか元気が無くなつてくる。皆
んなそれ以外に思考しているのだろう。俺は今考へ
ているように。俺は二んなことを考へていた。前に
青カンのした翌日はまあ仕事にありつけた。けど本當
に少しも眠らず、まる一昼夜続食の上での前夜だか
らさつかったな。でも割り合ひ来た。だから良か
たけどな。明日はどうだろうかな。さつと仕事だと
体が参いっつな。一番良いのは、仕事を辞めて
いる友達に逢い、朝、金借りて飯も食い、煙草も買
えたらええけどな。とにかく、明日は必死で仕事を
辞めよう。皆俺と同じような事思つてんだろうな我
と、とりとめなれ事を考へていた。煙草吸いたいな
と思つたが、三ヶ月は後一本、正確には半分しか
残つていないので、もう少し後吸う事にする。

無言の行のようになつた。静けさで耐えかねたよう
に仲間の一人が言いだした。

「俺はな、今考へてんのや、ポリ公の前を少すな
カップライか何かさ、やらかして不夕箱に入らでも
らうつとな。不夕箱はな、寒風さらされる事もない

ポリ公が火を消して去り、俺達も、二れじゃあ何
えがなれなと言いつながら、此の場を去ろうとしてい
る所へ、俺達三人を連れ之行つた。運命の手断師が
来る。時刻は午前の時前後だつたらう。

手断師が俺達に示した条件は、日給千五百円、あ
づけ無し、飯代三百円、毎日借し二百円、仕事は建
築現場の土工作業を比格的梨な仕事という事である。
当時の労働条件は、おおむね二んなものであった。

くが、青カンを苦む仲間達の多くはタコ部屋
を警戒し、一日位、飯なんか食ひなかつた、て、飯場
は嫌だという。過去において、おれぶん、痛めつけ
られた事があるのだから。俺も飯場を十軒余り歩い
ていけるが、本格的なタコ部屋には當つていなかった。
結局、俺達三人だけが行く事になった。タコニー
ズ連れられつた。たぶん、上新庄にあった福面組と
いう典型的な暴力飯場だった。

手断師は飯場につくなり、態度を豹変し、俺達を
怒鳴つた。

「手前、此處を回復せよと思つて、さうさう
毛鷲を福西飯場だぞ。山口組の系約であり、尾崎の
村上組は兄弟分だ。他所の飯場でのようになめた事
なしやがるよ、手前らの一匹や二匹、すぐ打ち殺
すぞ。この床下じゃ、なめやがった奴が何匹埋ま
つてゐるかめかんのだぞ。ええか、よく聞いて
おれんよつにしゃがるんだぞ。」

俺は内心舌打ちした。こんなものい所へ来たなど
思う。他の二人を見れば、蒼白な顔をして血の気が
ない。

部屋にはストローがたかいて居り、イスに腰掛け
た三人の男が、刀や入墨をちらつかせ、煙の根柢も
四、五本見える。奴らは見張役である。朝まで監視
つきとは、全く驚いた飯場である。俺達三人は手酷
師ト、ト、トと飯を食らえと怒鳴られ、外米では
らく飯に、何も入つていなり汁と汁、こら二二切
る晩飯を食った。俺達飯を食ひ終ると、手酷師が
部屋に入れと言ひ、寢床の指定をするし出て行き、
外からカギを掛ける。部屋を見れば、四十何人が寝

てゐる。此の部屋には、着崩した服もあつた。
勿論、テレビ、ラジオは無い。フトンは何年も洗ひ
ないのだらう、汚れて臭光りしてゐる。此んな汚い
フトンを見るのは始めてだ。部屋の中には、吐気
のする臭臭がある。俺達も寢床に入る。枕は三寸角
で、二回のバタ角だ。フトンの下に置いてある。

翌朝、頭にかーんといふショックを受け、目を覚
ます。起床の合図に、追廻しの野郎が、ハンマを俺
達の枕であるバタ角を、しげきやがったのだ。時刻
は午前四時三十分。昨夜、俺と一諸にまた一人が言
つた。

「まだ表は暗いぞせ」と。

すぐ追廻しの一人が俺まで来て、

「馬鹿野郎、寝呆けやがって、手前見てえな新入
りか、よくも一人前の口を聞きやがったな、二の
こけ奴と、いきなり殴りつける。」

二の新入りは鼻血を顔を鼻ホトして、

「ドウも済みません————と恐れおののき
つつ哀願して、やっと許してもらつた。」

皆、顔も洗わず飯を食う。水道は屋外にあり、屋外に出せば連げろから、顔も洗せたりとの事。食事を終り、皆に煙草(新生二十本入)一ヶ配給される。紙切此に新生一ヶと書き、自分の名前を記入し、籠に入れる。この竹籠は、皆又が人間の体長程あり、直径が三尺程もある代物だ。不思議な事に、この大きさに入れ物は半分近くも溜りこいる。

煙草を受取った者より外に出る。入口より俺達ばかり、木口掛け車まが約二回程の距離だのに、追廻し共が人垣互作っている。車にかけている木口には、容易に解けたりするように、一ヶ竹ごと箱束してりる。人垣を通って俺達が乗る。追廻し共は最後に乗り込み、後部を固める。

俺達の乗った車は七時少し前に作業現場につく。追廻し共が降り、俺達が降りてりる途中、一人の仲間が必死に走って逃げ出す。追廻しのうち三人が追いかける。逃げる男は、足の早い男を追走する者を引き離して行く。俺は心の中、上手に逃げれば良

いかと思つてはいたが、期待は裏切られた。追廻しの一人が自動車を追かけたからだ。逃げた男は、連れもどさい、スパナで殴られて顔は割れ、血が流出する血を舐め、顔は血の上、こいる。この仲間も、此の時より傷の手当も受けたりまま、俺達と同じように、実に一昼夜半に渡って連続作業をさせられる。

作業の内容は土工仕事でも重労働の部隊に入る地下の掘りだ。追廻し共は上から見やがて、もつと早く掘れと土のかたまりを投げつけやがる。

昼の弁当は、例の外水に梅干し一つだ。さすが追廻し共も、この弁当には気折がとげぬのか、他の職種の中行者に見られぬように気をつけよ、と言い、パネルで他から見えないように囲う。俺達はこの弁当を食って、翌日の八時^像頃飯場に帰り着く。又例のみそ汁と漬物だけだが、竹口は白だけ、酒(二級)二合を飲ませたらしい。新しく書き例の装に入る。俺は、又「クチャ」につかぬていた為、何も考えず事も出来ず、眠つてしまふ。(つづく)